山口恵照著

「サーンキャ哲学体系序説」

荷葉堅正

一

ここ十数年、主としてサーンキャ学派の研究に従事され、多くの論文を発表された山口博士が、それらの集大成として、本書、「サーンキャ哲学体系序説」を刊行された。まことに斯学のために慶ばしいことである。

このことは印度哲学・哲学史という学問分野に於いて実り多い効果を生じただけではない。吾々の如き大乗佛教論書の解明に従事している者に於いても多くの喜びをあたえるものである。大乗佛教論書の中には、この派の学説を始めとするインド六派の学説に何んらかの形で関説するものが、極めて多く、一般にはこれらの学説が所破の対象として提示せられ、それらを破することによって自己の学説がうち建てられているからである。このことを極言すれば、大乗佛教の論書の正しい理解は、サーンキャ学派やヴァイシェーシカ（Vaiçeṣika, 勝論）、ニヤーヤ学派（Nyāya, 正理）等のインド諸学派の理解なくしては、なされ得ないとまでいわれている。

サーンキャ哲学の研究に関しては、すでに外国にあってはガルベ（R. Garbe）教授を頂点として、キース（A. B. Keith）教授、ヂャー（Jhā）教授等の諸研究が数えられ、最近はフラワルナー（E. Frawallner）教授の佛教論書からの研究（Die Erkenntnislehre des Klassischen Sāṃkhya-systems）等も忘れられないものである。

国内にあっては木村泰賢、山本快龍、金倉円照等の諸教授の研究相次いで発表せられ、その中でも金倉教授の Sāṃkhya-tattvakaumudī の和訳等、それ以前に英・独訳が存したにしても、その後のサーンキャ研究を推進するに役立ったことはいうまでもない。また最近は前記フラワルナ教授の研究の影響も諸処に見られる。

博士がそれら諸研究を詳細に、詳細すぎる程刻明に調べられ、それらの成果の上に本書が構成されたことはいうまでもない。そのことは本文と相なかばする註釈によって知られる。

二

著者は、この研究の推移を、はしがきに「……はじめのうちは関係資料の蒐集整理に明け暮れ、……そのうちサーンキャの研究は哲学・哲学史の場合のいづれにせよ、結局カーリカが根本資料であり、カーリカ中心に推進し、Gaudapāda-bhāṣya, Māthura-Vṛitti, Sāṃkhyatattvakaumudī 等の注釈書を手がかりとして、カーリカ本文の解読にとりかかり、……諸註釈が見解を異にする場合は諸註釈の公平な評価・利用という批判的見

地に立ち、……それが困難な場合はカーリカ全体の統一的見解を可能ならしめるように科段分類する……」と示されている。

このことは、別のところで「サーンキャという言葉は、一般に数・計算を意味するといわれるが、これは、本書でとりあげるサーンキャを充分にいい表はしていない。ここでのサーンキャは、独自の原理（真諦）をもって存在現象の全体を数えつくし、これによって、当時のインド哲学の共通的課題である業・輪廻・解脱を明かし、一切の有情をして平等に解脱を実現させようとする」（はしがき1頁）と説き、歴史的観点に関しては「サーンキャをば歴史的展開過程に即して具体的に解明するということは、学界の現状においてはなお困難であるといわざるをえない」（本文2頁）と説き、また、諸註釈に関して、「カーリカ成立以後数世紀の間においては、サーンキャは哲学思想としての本質的な展開をほとんど示さぬようになり、カーリカに対する種々なる註釈が著わされ、サーンキャの註釈的伝統はここに確立せられた観がある」（本文8頁）と説かれている事等を併せ考察すれば、博士がこのカーリカの解釈を推進する趣意が一層明らかになる。

研究方針は飽くまでも、サーンキャの体系的考察であり、その歴史的観点は従になり、背後にかくれるか、もしくは体系的・全体的考察の後になすべきことを意図されたようである。専ら二十五諦、四肢分類、三肢分類の原理を従来からいわれる自性変異の二概念を媒介として論理的に解明されたのである。

第一章　サーンキャ体系とその研究方法

従来学者がしばしば依用したサーンキャの歴史的研究に関しては、極めて消極的であり、カピラに関する歴史的資料等が簡単であり、神話的でもあるという点で歴史的実在性が疑われるといって、論議が始まるともいへよう。博士は専らサーンキャ・カーリカの二十五諦の教説にその独創的体系を冠し、その独創的体系を考究するに際し、①イーシヴァラクリシュナのカーリカ原典の構造および、叙述の順序に従って逐次解明しながら全体の論理を解明する方法、②カーリカ原典の構造および叙述の順序にかかわらず問題をある立場にもとづいて取捨し、新たな組織において提示し解明する方法、と二つの方法を打ち出し、これらの二つの方法を統合し、一方に偏しないという。これが博士の研究方法である。博士のこの二つの方法については、博士が佛教の因明に関して考究されたところでも同じく二つの方法を提起し、その場合をむしろ後者を重視しながら、それとの密接な関聯において前者をも依用すると説く（「五支作法から三支作法へ」立命館文学八九、〔九〇・九一、九三〕、三四―三五頁）ものを参照すれば、一層明瞭になる。

第二章　サーンキャ哲学体系の綱要

ここに説かれる四肢分類の体系（非変異・自性、自性・変異、変異、非自性・非変異）と三肢分類（変異、非変異、智者）の

体系がこの研究全体を貫くものであり、特に三肢分類によって一論全体を解明しようとする意図も伺われる。これらの体系はカーリカに於いてはそれぞれ第三偈・第二偈に於いて説かれているのであり、「この三種の特相がサーンキャ体系全体を構成する二十五原理をば三種に分別し、特徴づけ、四種の対象と特相を標示する位置にある」と論の指示する内容に相応して、その形式が整えられ、それがともに一論の綱要として、三肢の分類を語っているとするのが注意される。

しかもそれが認識源泉としての量に対応説明せられて、三種の対象の分別にもとづいて、プラダーナとプルシャとの別異なる智（真実智）が獲得せられ、解脱が成就せられるとなして、サーンキャ体系が単なる形而上学でもなく、単なる認識論でもないことを指示している。

第三章　サーンキャ体系における批判主義

カーリカ第一・第二偈の所論であって、三苦の止滅を課題とする意味において、形而上学ないし認識論とを明瞭に峻別し、既往の経験的方法に対する批判を以て始まり、批判することに独自の出発点を形成し、これがカーリカ全体において展開せられるサーンキャ体系の動機となっていることが注意されている。

第四章　サーンキャ哲学体系の基礎

カーリカ第六九・七〇の両偈によって、カーリカが開祖カピラ以来の伝統を継承するものであるが、単なる継承ではなく、サーンキャ哲学思想をば主題とするが、体系的構成の点で独創性を有することに注意され、「この独創的体系、三肢が批判主義にもとづいて、標示せられ、基本命題をもって限定せられ、独自の論理的基盤・三量説に立脚しつつ、（第四偈―第六偈）精巧な組織――トリグナ（triguṇa）のもとに論証確立せられ、（第六―一六、一七―一九偈）転変説の理論的根拠である因中有果論も、基本命題をもって論証確立せられ、（第九偈）のちの転変説の展開は、ここに充分準備され、……転変説の全体の基礎はこの三肢の原理をもってつくされ、最後の解脱説も、この原理の必然的帰結とみなされる」と説き、

以下、第四章中に、

二、「サーンキャ哲学の論理の問題」

三、「ヴァクタ・アヴィアクタ・プルシャの論証確立」

を詳説せられ、第四章最後に

四、「総括と展望」が与えられ、第五章にトリグナ（三徳）の体系的学説が別な形で説述されている。しかしそれらは上述のように根本的には三肢の原理の上に構成されていることに変りはない。

三

第四章二、以下が本書の主要部分であるが、サーンキャ学説

に全面的にとりくむ機会のなかった筆者は、全体の理解に先だち、専ら集量論等で所破の対象となるサーンキヤ思想の解明を考え、一読することになった。陳那の集量論と勝主覚のその註釈に対論として掲げられるこの派の学説の具体的な形をサーンキヤ学派内の所論によって確認しようとしたのがその考察の一つであるが、博士の方針が歴史的なものより、体系的な理解に重きを置かれたためか、あるいは Nyāya 学派や Vaiçeṣika 学派等に見られる如くには、註釈があたえられていない為か、すでに Nyāya 学派や Vaiçeṣika 学派では確認された如き量論変遷の跡は見られなかったが、それら所破の対論の教義的理解一々については教えられることは多く、大乗佛教論書の研究にも教えるところきわめて大であると思われる。

次に筆者は今一つ問題として、博士が且て発表された「五支作法から三支作法へ」という前述の論文において、「三分説における自証分は自比量としての現量、及び他比量としての喩に連関すると見られる。但しこの点未だ充分に解明せられてはいないようである」（前掲、三三頁）といって、陳那によって主張せられた因明の独創性に対して註記されたものが、サーンキヤ学説の上で解説されて居ないかということも筆者の関心事であったのであるが、問題の所在が相違するためかそれについて詳説されることはなかったように思われる。（このことは、「五支作法から三支作法へ」と、一連のものとして発表された「因明論式成立の条件」「三支作法対三段論法」参照）

何れにしてもこの勝れた体系的研究を内容として、この上に出来得る限りの歴史的研究が加上され博士の御研究が一層立派なものとなり、吾々の如き佛教の論書の研究にたずさわる者にも、その恩恵がこれ以上に与えられることを御願いしたいと思う。

終りに四種に及ぶ索引があり、研究者には便利である。

（昭和三九年三月　京都　あぽろん社　A5　本文三一一頁
索引三六頁　定価一五〇〇円）